



## 研究調査報告

# 戦時下日本の大衆メディア研究 台湾調査報告

鈴木 一史

(非文字資料研究センター 研究協力者)

松本 和樹

(非文字資料研究センター 研究協力者)

### はじめに

戦時下日本の大衆メディア研究班では、センターが所蔵する紙芝居 241 点を軸に研究を進めながら、あわせて植民地も含めた各地での紙芝居の発掘や関連資料の収集に努めてきた。

2015年9月11～17日に実施した台湾調査では、2月におこなった台湾調査に引き続き、戦時下において紙芝居教育の拠点となっていた地域の現地調査と、紙芝居教育を受けた人物への聞き取りを中心におこなった（2月の台湾調査については、No.34の安田常雄「台湾・福岡調査報告」を参照されたい）。調査地は前回同様、紙芝居教育の拠点だった公学校を対象を絞り、台北と宜蘭の2地域を設定した。また、ひろく戦時下台湾の大衆メディアに関する情報を収集するため、台北の台北市立美術館、国立台湾図書館、南投の国史館台湾文献館で関連資料の調査をおこなった。

ここでは、宜蘭、台北両地域での聞き取りを中心に、植民地時代の台湾各地における紙芝居活動の様子について報告する（以下、台北調査については鈴木が、宜蘭調査については松本が担当した）。

### ◎台北市立美術館

9月11日（金）夕方、台北市立美術館（以下、同館）を見学した。

1983年に設立された同館は、20,000㎡の敷地を有し、近現代の台湾に関する美術品を4,000点以上収蔵している。1階が企画展示室、2階が常設展示室で、観覧時には、常設展示室内で収蔵品展「台湾製造・製造台湾」展が開かれていた。この展覧会は、日本統治下の台湾（1895～1947年）を、台湾としての主体的な意識が形成された時代と捉え、絵画や工芸、書、写真などの収蔵品を「萌發」「伏流」「風采」「摩登」「築夢」「家郷」の6テーマに沿って紹介する内容だった。

筆者が特に印象的と感じ、研究班でも議論になった作品が、郭雪湖「南街殷賑」である。日本統治時代の台湾の様子を描いたこの作品の特徴は、多くの看板がひしめき合い、人々が行き交う、活気ある町の様子を描いているところにある。植民地の中でも日常の営みがあり、人々が生活していたことの意味を、この作品は問いかけているのではないだろうか。

後日見学を行った「学生運動」展と同様、様々な見解が存在する出来事を正面から取り上げる姿勢は、学芸員として見習うべきものと感じた。



写真1 台北市立美術館

### ◎宜蘭県史館（李英茂さん聞き取り）

9月12日（土）、宜蘭県史館にて、李英茂さんから宜蘭での紙芝居活動についてお話をうかがった。宜蘭を調査地にしたのは、事前調査で、同地の利澤國小（旧利澤簡公学校）で堀之内昇という教員が紙芝居教育をおこなっていたことが判明したからである（椰子見謙一「台湾航路」『教育紙芝居』1940年9月号）。利澤國小と連絡をとることはできなかったが、宜蘭県史館を通じて、公学校時代に紙芝居を見たという李英茂さんを紹介していただいた。

李英茂さんは1929年、宜蘭の生まれである。

1934年に幼稚園に入園、2年間通った後、宜蘭公学校高等科に入学。1943年、台北州立宜蘭中学校に入学し、3年生のときに学徒召集を受けた。戦後、1952年ころから学校の先生を務め、童話や小説の翻訳もおこなっていた李さんは、現在宜蘭で歴史ガイドのボランティアをしている。

当日は、李さんが事前に言うことをメモしてくれていたの、まずその内容を語ってもらった。その後、私たちが質問するかたちで、紙芝居以外のことも含めて李さんに自由に語ってもらった。

メモによれば、李さんの知っている紙芝居は1940年頃の皇民化運動のあたりのものだという。紙芝居の木箱を自転車の荷台の上に載せて、公園で上演していた。そこで見た紙芝居には、子供の目を惹くような工夫「桃太郎」の桃が流れる、「猿蟹合戦」の蟹が這う）があった。ここで見た紙芝居は、当時の李さんにとってサーカスや指人形芝居（日本人の巡回劇団で、桃太郎や時代劇などをやっていたという）とともに、待ち遠しい楽しみの一つだった。

その後の聞き取りで、李さんが紙芝居を観たのは、台湾神社祭のときであることがわかった。場所は公園で、誰かはわからないが、教育部の人か、奉仕活動の女学生（日本人）が演じていた。観客は子供や学校の生徒で、だいたい20人から30人くらいだった。

李さんの話で面白いのが、公学校における紙芝居の活用だ。李さんの通っていた公学校では、高学年になると学校から紙芝居を借りることができた。放課後や土日などに、「桃太郎」や「浦島太郎」などの紙芝居を、低学年相手に演じていたようである。ただ、紙芝居の所在については、先生を通じて借りていたために、学校のどの場所に置かれていたのかはわからなかったという。

聞き取りの内容は多岐にわたったが、李さんの話のなかでもっとも鮮明な記憶をもって語られたのが学校時代の思い出だ。紙芝居と直接関連するわけではないが、紙芝居がおこなわれていた場を知る手がかりとして、学校や先生に関する証言は重要だと思われる。印象的なのが、学校が厳しくも楽しい場所だったという点だ。中学校時代の軍事教練の厳しさ、特攻隊基地となった南飛行場づくりの大変さを、李さんは特攻で亡くなった同級生の思い出をまじえながら語る。しかし、そうした厳しいこと、大変なことよりも楽しいことの

方が多かったと李さんは言う。例えば李さんが公学校4年生のときに教わった崎山先生は、「家なき子」や「母を訪ねて三千里」などの童話のほか、自作の童話（「はだしのキョウ（李さん注；籠のこと）」）も読み聞かせてくれたという。このときのことを李さんは楽しそうに語ってくれた。

李さんへの聞き取りからわかったことをまとめつつ、今後の調査の課題についてここで一度整理したい。まず、李さんへの聞き書きからわかったのが、宜蘭における紙芝居活動の動向である。宜蘭では、紙芝居が行事の際に指人形劇やサーカスとともに娯楽ものとして上演されていた。また、公学校では日本の童話や童謡が教育の場で活用され、その一環として紙芝居の貸出がおこなわれていた。興味深いのは、李さんの記憶では、これらの紙芝居がいずれも童話か、童話を題材にしたものであったが、国策紙芝居でなかったという点だ。ここで思い出されるのは、聞き書きの途中、李さんの口がしばしば重くなるがあったことである。国策紙芝居について見たことがありますかと私たちが尋ねたとき、李さんは口を閉ざし、見たことはないと答えた。一方で、国策紙芝居に描かれているような絵は見たことがあるという。ここからわかるのは、李さんのなかで、紙芝居と国策紙芝居とは明らかに違うものとして認識されていること、そして少なくとも、国策紙芝居について何らかの認識を持っていることである。その認識の裏には、長らく教員という職に就き、現在も歴史ガイドをしているという李さんの経験が見え隠れする。李さんの語りは、私たちは植民地時代における紙芝居の位置の複雑さを再認識させるものであった。



写真2 宜蘭県史館での聞き取りの様子

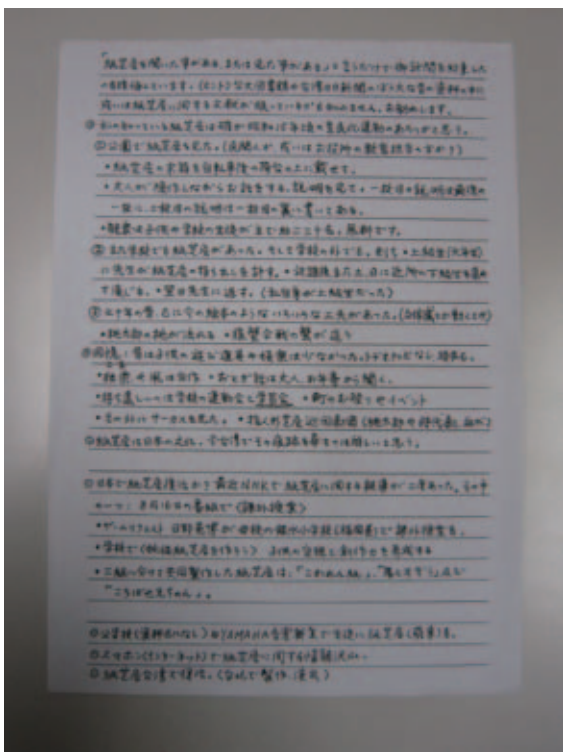


写真3 李英茂氏の手書きのメモ

### ◎台北市太平国民小学

9月13日(日)には、台北市太平国民小学(以下、同校)で調査を行った。

同校は1898年に設立された「大稻埕公学校」が起源である。同校周辺の土地はかつて「大稻埕」と呼ばれており、後に「太平町通」となったことで1922年に「太平公学校」に改称されたという(「歴史悠久好成绩美哉我太平 臺北市太平國小紅樓簡介」臺北市太平國小・臺北市太平國小校友會)。当日は、同校関係者の聞き取り及び所蔵資料の閲覧・撮影、校内見学を行った。本稿では、聞き取りの内容を紹介するとともに、共同研究を進める上で重要と思われる論点を提起したい。

聞き取りを行ったのは、蔡嘉元さん(1930年生まれ。同校40期生)、柯明正さん(1930年生まれ。1975～1979年に同校で教務主任)の2名である。

蔡さんは台北生まれである。父は映画館「永楽座」を経営していた。当時、台北には映画館が10館ほどあり、家の近辺には「永楽座」を含め「第一劇場」「太平閣」(終戦後は「新民劇場」。経営者が変わると劇場名も変わった)「第三世界館」と4館の映画館があったという。永楽座は6人用の席が並んでおり、上映作品は坂東妻三郎や嵐寛寿郎(鞍馬天狗)らが出演する日本映画が主だったが、「ロビンフッドの冒険」などの洋画も上映された。館主

の父はフィルムの配給も手掛けており、台中や嘉義の映画館に貸し出した「キング・コング」がヒットして返却が遅れ、汽車で母とともに回収に行ったこともあるという(蔡さんの名前にある「嘉」は嘉義からとられた)。当時は、台北市内をチンドン屋が一時間ほど練り歩き、電信柱に旗を立てて映画の宣伝を行っていた。

蔡さんによれば、戦前戦中期の台湾では二種類の紙芝居があったという。一つは、上演用の木枠がついた自転車を使うもので、無料で観覧できた。もう一つは、覗きからくりのように、1回1銭(当時は卵3個が10銭)で中を覗くものである。柯さんの話では、前者は毎日ではないものの、特定の曜日に来ることを皆が知っており、特に音を出さなくても上演時には人が集まったという。上演前と上演途中に飴を売っていたそうだ。

実演の様子や具体的な内容を柯さんに尋ねたところ、次のような答えが返ってきた。

無料で見られるため大人も集まっており、一回に12～13人程度が見ていた。場所は十字路の脇で、神社等では(荘厳な場所のため)紙芝居は上演されなかった。内容は爆弾三勇士をはじめ戦争ものばかりで(「チョコレートと兵隊」や「麦と兵隊」などを見た記憶があるという)、紙芝居の文字は日本語、実演の際は日本語と台湾語の「ちゃんぼん」だった。学校では日本語を話さなければビンタを受ける一方、街中で子供同士が話す時は台湾語を使っていたため、「ちゃんぼん」でも十分に通じた。学校の中で紙芝居が上演された記憶はない。寺の境内で上演されているとすれば田舎だったのではない。現在80歳以上の人間にとって、子供らしく過ごせた時間は4～5年間位だった。小学3年生以降はほとんど戦争で、1938～1939年頃になると紙芝居どころではなくなった。

今回の聞き取りは、戦時下台湾における紙芝居の実態を知ることが主眼だった。しかし、聞き取りの中で、両氏は紙芝居よりも人気を博していた娯楽として人形芝居を挙げ、当時の実態を語られた。

人形芝居は、大人・子供を問わず台湾での大きな娯楽の一つである。病気の快癒などを寺に祈願し、そのお礼として上演を依頼したもので、地域の住民に見せるという意味合いもあった。上演場所は、台北の場合は寺や廟、お祭りの場などで、桓武や三国志などの歴史物、史艶文という架空のヒーローものやオリジナルストーリーが上演されていた。紙芝居のように飴を売るわけではなく、

無料で見られたこともあって、大人も子供も上演スケジュールを把握していた。また、駄菓子屋で売られていたくじの景品にも、人形芝居に使う簡素なつくりの人形があった。紙芝居は動きがなくストーリーも単調で、堅苦しく宣伝的な内容だったため、人形芝居の方が面白かった。手を動かすだけではなく、人形の動作や声を聞いて、人が操っているようには見えないと感じた。

1941年以降はほとんど見なくなったが、日中戦争の頃からアジア・太平洋戦争の時期に統制が厳しくなったと感じた。その頃は、上演の言葉の中に反体制或いは反戦的な要素がないか否かを、私服の刑事が見張っていたことを覚えている。大陸や（三国志などの題材でも）戦争の目的には触れないようになったことから、子供でも統制の厳しさを感じていた。

聞き取りは午前中の二時間を使って行われ、昼食を挟んで午後からは資料閲覧と撮影を行った。



写真4 台北市太平国民学校第二回修了記念写真帖  
台北市・太平国民小学所蔵

以下では、聞き取りの内容を踏まえ、今後の共同研究において重要と思われる論点を挙げる。

一点目は、紙芝居と人形芝居との比較である。柯さんは聞き取りの中で、人形芝居と比べて紙芝居が霞んで見えたという発言をされた。当時の台湾の娯楽において、紙芝居がどのような位置にあったかは、今後の研究が望まれる。

二点目は、台北と他都市との比較である。聞き取りの際、柯さんは寺の境内での紙芝居実演を見たことはなく、田舎で行われていたのではないかと語られた。兩人ともに台北育ちであることを考えるならば、他地域での紙芝居の実態との比較が必要だろう。

三点目は、時代の中で変化する大衆文化といかに向き合うかという問題である。蔡さんと柯さんの育った環境

は対照的である。聞き取りを行った研究班の安田氏が「モダンボーイ」と評したとおり、蔡さんは映画館を経営する父のもと、映画をはじめ当時の大衆文化を豊富に摂取できる環境に身を置いていた。対して柯さんは、小学4～5年の時、航空機に使うひまし油を作るために空き地に畝を作り、300～400m程離れた屠殺場から牛馬の糞を運んでいたという。蔡さんが柯さんの話を聞きながら「稲を見たこともない」と述べたことは、二人が育った環境の違いを象徴的に表している。

より多くの映画に接していた蔡さんこそが、統制が進む中で大衆文化のありようを正確に捉えられる感性を培うことができただろう。しかし、蔡さんは自らが受けた教育を懐かしそうに語り、礼節が失われたと現在の社会を憂っていた。対して柯さんは、人形芝居の変化について「絶対に大陸のことには触れない」「戦争に関する問題をとっても注意して触れない」と語られた。そして、筆者の「後からではなく、子供の頃に人形芝居のあり方が変わったと感じたか」という問いかけに、「やっぱり、段々と少し変わったなあ」と答えていた。大衆文化の変化を感じ取り、それを自らの言葉で捉えていたのは、「モダンボーイ」ではなく、航空機のひまし油を作るための労働を強いられた少年の方だった。ここからは、「モダン」であることと、時代の変化を日常から感じ取るの間にある隔たりという問題が読み取れる。国策紙芝居、ひいては戦争と大衆文化との関わりを考える上で、この問題は避けて通れないのではないだろうか。

今回の聞き取りは、台北での紙芝居の実態や当時の子供の暮らしぶり、そして紙芝居よりも影響力を持った人形芝居の実態を知ることができた点で、有意義な調査だった。



写真5 台北市太平国民小学にて